

ヒシを食べる動物についてのエッセイ

伴 幸 成

昨年8月8日、水草研究会が倉敷で催された折、エクスカッションで案内していただいた百間川の橋の上から、オニバスとともに、異様に赤っぽく変色したヒシ群落が見えたはずだ。あのヒシ群落は、9月初旬には腐り始め、葉と茎がバラバラになって一粒の実も捻らせることがなかったに違いない。

またあいつがやってきたのだ。

富栄養化の進んだ琵琶湖で、1977年に飛躍的な分布拡大を成しとげほとんど無敵とも思われたヒシ群落は、1979年に未曾有(?)の大被害にみまわれることになった。ヒシハムシである。その年の夏には、葉という葉の上に交尾するために重なった成虫の姿が見られ、白い卵塊がそこらじゅうに産みつけられていた。

1979年には、広大なヒシ群落が、ほんの5ミリほどの小さな甲虫に食い尽されてしまったわけだが、翌年には、この小さな甲虫はさらに小さい虫によって食い尽されてしまうことになった。ミズカメムシである。東南アジアでは、天をおおうばかりのトビロウソウの大発生が、小さなメクラガメの一種によって押さえられていることが知られており、日本の水田でも、ウンカ・ヨコバイ類の天敵と考えられるケシカタビロアメンボが夏期に異常な高密度に達することを、以前私達が報告したことがある。ミズカメムシがこれらのカメムシに近縁のアメンボの一種であることを考えると、体が小さい(

約3ミリ)にもかかわらずヒシハムシの有効な天敵となっていることにも納得がゆく。

続く1980年には、前年のようなハムシの大発生は見られず、1981年に、ヒシをめぐる水生昆虫の写真を撮ってもらうためにプロの写真家を伴って琵琶湖を訪れた時には、皮肉にも一匹のヒシハムシも見つけることができなかった。

このようにヒシハムシの大発生と崩壊とがごく短期間に生じたのは、ヒシハムシとミズカメムシの年間世代数が比較的多く、高い増殖率を示すためと思われる。残念ながら、去年は琵琶湖のヒシ群落を見る機会がなかったのだが、今年はまだ赤く変色したヒシ群落を見ることができのかもしれない。

ヒシを食べる動物として、琵琶湖では草食魚のワタカも重要である。ワタカの群れがやってくると、そうとう大きなヒシ群落でも、一夜にして葉が食い尽されてしまう。

また、奈良公園では、ヒシはある水深以上のところしか生えないらしい。ある水深とはシカの背丈のことである。シカは好んでヒシを食べているらしい。

佐賀県には「ヒシ摘み歌」という民謡があるが、人々がクリークにたらい舟を浮かべてヒシの実を採る時に歌ったものである。ここでは人類もヒシの天敵となっているようだ。(愛知県立西尾東高校)

ホテイアオイを喰べる野鳥

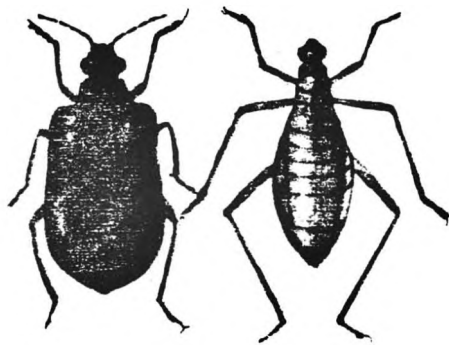
齊 藤 吉 永

ホテイアオイ *Eichhornia crassipes* (Mart.) Solms. は一般の家庭でも愛培されているが、文献によれば英国に入ったのが1879(明治12年)というから今から僅か100余年に過ぎない。

日本に渡来した時期は詳やかではないが明治年代には間違いないようである。

1902(明治35年)に新宿御苑から台湾に3株が送られたという記録があるらしいので明治の中頃にはすでに日本に入っていたのかも知れない。

暖地では害草扱いされている報道も見受けられるが、養豚場などで汚水処理に一役買って好成績を上げたということも聞いている。目下全国一汚れているという千葉県立公園でもある手賀沼で2年前から県環境部水質保全課が実験的に栽培を始めている。



(左) ヒシハムシ、(右) ミズカメムシ
(「アニマ」No.113より)